

真菌類の子実体（胞子をつくって拡散する器官）が肉眼ではっきり見える大きさのものは、一般に「キノコ」と呼ばれています。キノコといえば秋の産物という印象が強く、実際にキノコのうち半数以上は秋に発生します。しかし、春～初夏にかけて発生するキノコも少なくありません。ハツタケ（初茸）の仲間、アミガサタケ（網傘茸／編傘茸）の仲間はその代表ですが、中にはよほど目を凝らしていないと見過ごすような小さなキノコもあります。

先日大磯丘陵の傾斜地の雑木林で見つけたこのキノコもその一つです。枯れ枝に直径 2~3mm の黄土色の子実



体が、たくさん発生しています。最初は粘菌（変形菌）の子実体かと思ったのですが、針金状の極細の「茎（顕花植物の茎とは別のもの）」があり、傘の裏には「ヒダ」も存在したので、真菌の子実体（キノコ）とわかりました。

この種の極小キノコは同定に苦労します。形態は「スジオチバタケ」によく似ているのですが、あまりにも小型すぎます。しかもスジオチバタケは、枯れ葉の裏側に菌糸をまん延させるのですが、これは枯れ枝の上です。結局「ホウライタケ科のキノコ」というあたりまでしかわかりませんでした。それにしても、自然というのは、なぜこんなに魅力的な造形を見せてくれるのでしょうか？

2025 年 6 月上旬
神奈川県大磯丘陵